

<知性・創造性…知性・創造性を育むカリキュラム・マネジメント>

主体的・対話的で深い学びにつながる

組織的なカリキュラム・マネジメントの在り方

提案者 山口県周防大島町立森野小学校長 石本和巳

1 提案要旨

(1) はじめに

社会構造の急速な変革が見込まれるこれからの社会において、学校は、子どもたちの「生きる力」の育成に向けて、「しなやかな知性」と「豊かな創造性」を育む必要がある。

小規模校 10 校の山口県大島郡においては、知性・創造性を育む組織的なカリキュラム・マネジメントの体制づくりに、校長が連携・協働して具体的方策を明らかにすることとした。研究は、主体的・対話的で深い学びにつながるカリキュラム・マネジメントにおけるコミュニティ・スクールの仕組みの活用と教職員の連携・協働に視点を置き、「チーム大島」として連携して進めた。

(2) 研究の概要

① 拡大集合学習（以下「KS学習」）

ア KS学習の形態

小学校が中学校区に分かれて、低・中・高学年ごとに合同で行う学習活動である。

イ KS学習の目的

- ・主体的・対話的で深い学びの場の充実
- ・教員の授業改善や授業力の研修の充実
- ・小学校間連携と小・中学校連携の充実

ウ 校長による具体的方策例

- ・担当学年の準備部会の主催
- ・取組の方向性と方策の協議，実施状況の把握，次年度の計画立案など
- ・学力向上，授業改善，資質能力向上の場としての位置付けと，教職員の意欲高揚
- ・目指す児童像，重点目標，研修主題決定

への取組の推進

- ・KS学習のカリキュラムでの位置付け
- ・体制づくりと人材育成

② ユニット型研修（開かれた授業研究）

授業研究会に，学校運営協議会の委員（保護者・地域）が加わり，教職員と授業改善や人材育成を推進する体制

ア 取組例

- ・人材育成ユニットの構成，授業研究
- ・小・中学校合同のユニット型研修の実施

イ 校長による具体的方策例

- ・校内研修におけるユニット型研修の位置付けと，参加者の意識改革
- ・地域と学力面の課題の共有，目指す児童像と解決の方策の協議の場づくり（熟議）
- ・保護者・地域の気づきや願いを授業改善や教育課程に反映する場づくり
- ・重点単元の設定や評価・改善，組織的なカリキュラム・マネジメントに取り組む体制づくり
- ・各授業研究の連続性，PDCA機能の強化による実効性ある授業研究の推進

③ やまぐち型地域連携教育

社会に開かれた教育課程を組織的にマネジメントする持続的システムの構築

ア 取組例

- ・中学校区学校運営協議会と部会の運営
- ・小・中・高連携によるカリキュラム「起業体験学習」（キャリア教育）の実施

イ 校長による具体的方策例

- ・中学校区学校運営協議会の目的を明確化
- ・活動内容の方向付け，地域連携カリキュラムをマネジメントする組織づくり

- ・各学校運営協議会におけるP D C A機能のシステム化
- ・中学校区内の小・中学校の学校評価における共通の評価項目の決定
- ・小・中学校, 高等学校 12年間の連携した教育ビジョンの提示と組織づくり

④ 校長の役割

- ・組織的なカリキュラム・マネジメントへの意識改革と意欲の高揚
- ・コミュニティ・スクールを生かした持続性・実効性あるシステムの構築と強化
- ・小規模校間の連携・協働の組織づくりや活動の場の構築
- ・担当学年のKS学習の運営

(3) おわりに

本研究で、校長が連携・協働し、体制構築と運営を進めることが、主体的・対話的で深い学びにつながる組織的なカリキュラム・マネジメントの推進に大切であることが明らかになった。

今後もチーム大島として連携・協働を推進し、運営や体制の在り方を探り、リーダーシップを発揮する所存である。

2 研究協議

(1) 質問及び協議

① 質問と回答

Q 中学校卒業後の進路は？

A ほとんどの生徒が地元の高校へ進学。中高連携が活きている。

Q KS学習の具体的な教科・領域は？

A 当初、交流が多かったのだが、授業研究中心に変わってきた。教科は国語・算数を基本に3～4人が担当している。打合わせ会を設けて年計通りに進め、主体的・対話的な学びにつながる授業をめざす。

Q KS学習のメリット、デメリットは？

A トップダウンではやらされ感が募る。みんなで研修テーマを考え、ボトムアップ式でやっている。教員の意識改革を図

ることが大切。

Q 子どもの姿の変容は？

A 固定された人間関係から脱却でき、自己肯定感アップにつながっている。

② グループ協議

<研究協議の柱>

主体的・対話的で深い学びにつながる組織的なカリキュラム・マネジメントの推進に、校長が連携・協働して果たすべき役割(具体的方策)

ア 「KS学習」は、事前準備やすり合わせが大変だと思うが、校長として、グラウンドデザインを考え、若手を育成し、組織運営を図ることが大切である。

イ 「ユニット型研修」は、地域を巻き込み、地域や保護者とも目指す児童像や課題意識が共有できている。

ウ 地域が研究授業に参加したり、地域の実情に合わせた町の取組があったりする。小小連携や小中連携は難しい面もあるが、校長がリーダーシップをとって進めていくことが大切である。

(2) 分科会のまとめ

人口減少などの子どもを取り巻く情勢の中で、校長自らが進んで地域や保護者、他校とのつながりを求め、開いていくことが大切である。KS学習、コミュニティ・スクール、ユニット型研修、やまぐち型地域連携教育などのたくさんの取組の成果は校長自身も連携協働することの大切さを示している。



＜知性・創造性…知性・創造性を育むカリキュラム・マネジメント＞

豊かな人間性とたくましく生きる力をもつ子どもの育成

～ひらく・かかわる・つながる 境港～

提案者 鳥取県境港市立余子小学校長 仲 倉 孝 浩

1 提案要旨

(1) はじめに

境港市では、立地条件を生かした海と空の港としての機能が整備されてきた。それに伴い、従来からの水産業に加えて、近年は運輸業と観光業も盛んになっている。しかし、他の地域と同様に人口減少や少子高齢化が今後の大きな課題である。

境港市では、この人口減少や少子高齢化傾向も見据えて、平成29年度から中学校区単位でのコミュニティ・スクール制度の導入準備を開始し、今年度は第一中学校区がコミュニティ・スクールとなった。そして、令和3年度には、市内の3中学校と6小学校すべてが、1中学校2小学校を単位とするコミュニティ・スクールとなる。それと並行して、数年前から、小中一貫校の設置も検討されており、境港市の学校教育指針「一人一人を大切にした質の高い学校教育の推進」に基づき教育活動に取り組んでいる。

(2) 研究の概要

境港市小学校長会では「豊かな人間性とたくましく生きる力をもつ子どもの育成」をテーマに掲げ、中学校区の連携をさらに深め、人や地域とのかかわりを大切にして、「ひらく」「かかわる」「つながる」をキーワードにした様々な取組を進めている。

① 中学校区の定例校長会の取組

境港市の月例校長会には、小・中学校長全員が集い、小中が連携して、各中学校区で様々な取組を行っている。

② 身近な「ひと・こと・もの」と直接関わ

る体験を大切にした取組例

校長の指導助言のもと、総合的な学習の時間のカリキュラムを、年間を通したPDCAサイクルでマネジメントしている。

特色ある学習の例として、児童が地域活性化の活動を行う「おさかなロードを盛り上げよう」の単元がある。(境小学校)

③ 豊かな人間性を育むための道德教育の充実を図る取組例

学校目標達成に向けた道德教育のカリキュラム・マネジメントに力を入れている。

年間指導計画別葉を掲示して、随時更新し、火曜日を「道德授業づくりの日」として授業研究している。また、「児童の光る言葉」を切り口にして研究協議を行っている。(上道小学校)

④ 英語教育を通じた国際社会に貢献できるグローバルな人材の育成の取組

境港市の「北東アジアに向けた西日本のゲートウェイ」としての役割を背景に、平成26～30年度研究指定の研究実践成果を市内小学校で共有・活用しながら、外国語教育に力を入れている。

今年度は校長会と関係機関の連携を基に、児童から外国に発信する活動も行った。

⑤ 円滑な小学校統合に向けての取組

令和2年度の2小学校の統合に向けて、両校の校長がマネジメントしながら、職員・児童の参画による児童交流活動を実践している。(余子小学校、誠道小学校)

⑥ コミュニティ・スクール準備の取組

境港市では、中学校区のコミュニティ・スクール導入準備を行っている。校長は地

域との連携をさらに深め、情報収集してビジョンを持ち、教職員、保護者、地域の学校関係者に、コミュニティ・スクールの説明をしながら、その意義を理解してもらう責務がある。また、準備委員会や熟議に参加しながら、コミュニティ・スクールの立ち上げに参画していかなければならない。

以上のことから校長の役割をまとめると、

- ・今あるべき姿とそれに向かうグランドデザインを教職員に明確に示して、地域の特色を生かした教育課程を編成する。
- ・常に情報収集しながら、教職員と協働し、カリキュラム・マネジメントを推進する。
- ・保護者、地域機関の関係者、ボランティア等と協働し、信頼関係を築くことを通して、「社会に開かれた教育課程」の実現につなげる。

ことがあげられる。

(3) おわりに

境港市の小・中学校長は、互いに「ひらき」「かかわり」「つながる」関係を大切にしてきた。この関係を基に、各学校では「ひらく」「かかわる」「つながる」をキーワードに、知性・創造性を育むカリキュラム・マネジメントを研究・実践している。

今後もこれまでの実践を情報共有し、進化させながら、境港市の特色を生かし、将来を担っていく子どもたちの育成をめざしたい。

2 研究協議

(1) 質問及び協議

① グループ協議

＜研究協議の柱＞

地域のもの・こと・ひととの関わりや中学校区の連携を生かしたカリキュラム・マネジメントを確立するための校長の役割

ア 総合的な学習の時間・道徳教育・英語教育を中心とした指導計画等大変参考になった。大きなグランドデザインを校長が示し、職員が理解した上で9年間を見据えた取組

の様子がよくわかった。

イ 総合的な学習の時間は、活動ありきで終わらず、どんな力をどのようにしてつけるのか指導計画に明確に示してある。今後は探究的な学習の研究が課題として上がってくる。

ウ 地域とのつながりを充実させることは大事であり、公民館活動を利用する総合的な学習の時間の事例は参考になった。

エ 「統合」ではなく、「新しい学校をつくる」という前向きな意識で取り組み、成功した事例もある。

オ 地域・保護者参加型の道徳の授業から、子どもたちの自己有用感が高まったという事例もあり、取り入れてみる価値はある。

(2) 分科会のまとめ

地域の宝や中学校区の連携を生かすカリキュラム・マネジメントを確立するためには、「つなぐ」という校長の役割が非常に大切である。そしてグランドデザイン作成の際には、校長自身が「夢」を語り、「価値づけ」をすることが重要となってくる。



<豊かな人間性…豊かな人間性を育むカリキュラム・マネジメント>

深く学び、自他を大切に作る豊かな人間性を育む

～自尊感情に支えられた学力を育てる取り組み～

提案者 広島県広島市立福木小学校長 三吉和彦

1 提案要旨

(1) はじめに

人権教育を基盤とし「自らの未来を主体的に切り拓き、共によりよい社会を創ろうとする」豊かな人間性の土台としての「自尊感情」を育む学校経営について提案する。

実態として学習習慣の定着が低く、学力の剥落が見られる中で、さらに自尊感情に支えられた学力を育てる取り組みを行っている。

(2) 研究の概要

① 学校経営の土台となる人権教育

- ・人権についての教育
- ・人権としての教育
- ・人権を通しての教育
- ・人権をめざす教育

② 自尊感情

- ・自分らしく生きるための基になる感情
- ・自他を高めあって生きるための基になる感情

③ 校長の役割

ア 自尊感情に支えられた学力

自己実現する学力、諦めずに挑戦し続ける学力、社会貢献する学力、多様性を尊重する学力を育てる。⇒自他を尊重する学力

イ 校長のビジョン

日々の授業における教員の言動のポイント「みる まつ きく」の定着を図っている。校長自ら授業を公開し、職員と共に振り返ることでイメージを共有するようにしている。

ウ 教職員の自尊感情

「さんちゃんの掲示板」(校長の掲示板)で校長のビジョンを具現化している取り組みを「環境づくり」「指導対応」「具体的なスキル」の視点で評価する。先生方の実践が校長のビジョンとどう結びついてきたかを肯定的に評価する。このような取り組みの継続が、ビジョンの定着と教職員の自尊感情を高めることにつながる。

エ 校内研修・授業研究の在り方

校内授業研究会は「発表の場」ではなく、教職員の「力量形成の場」であることを確認した。さらに、研究で取り上げる授業は、参観するのではなく、映像で記録し、文字で起こした上で事後の研究会に臨んだ。児童の発言など、事実から見取ることを中心に研修を行った。不規則言動や異質性から学ぶことが多かった。

オ ゆとりを生み出す業務改善

校内研修・授業研究を充実させるためには、ゆとりが必要である。そのため、昨年度行った取り組みをただそのまま続けるのではなく、それぞれ次の視点で吟味した上で行事などを行っている。

常に教育活動における「目的、意味、指導方法(内容)、効果」を確認・検討を促す。学校教育の役割と責任を再確認する。優先順位付けと取捨選択を大胆に行う。

- 「今まで(昨年度)やっていたから」
- 「子どもが喜ぶから・盛り上がるから」
- 「保護者・地域の苦情がこないように」

という理由は、行事などを継続する第一の理由にはしない。

(3) おわりに

すべての子どもが人として大切にされ、力をつけるための取り組みを推進してきた。そのために、授業研究を通して授業改善を図り、「みる まつ きく」を定着させるようにしてきた。特に、若く経験の浅い教員が改善の意思と意欲をもって授業づくりに励んでおり、成果が上がり、子どもたちには自尊感情に支えられた学力が身につくにつつある。

授業改善は着実に進んでいるが、「全国学力・学習状況調査」においては無答率が高い傾向がある。今後も児童の実態から学校全体の課題を明確にし、人権教育を基盤とした学校実践を推進していきたい。

2 研究協議

(1) 質問及び協議

① グループ協議

＜研究協議の柱＞

豊かな人間性を育む人権尊重の教育の推進と校長の役割

ア 児童一人一人が尊重される授業づくりの視点を具体的に実現するために、「みる まつ きく」を大切に作る姿勢が一貫している。さらに、校長自らの授業公開でビジョンを浸透させている取り組みが参考になった。

校長のビジョンを職員に浸透させる工夫が必要であると改めて感じた。

イ 児童の自尊感情を高めるとともに教職員の自尊感情を高める必要もある。校長のビジョンを具現化する取り組みを肯定的に評価し、それを職員に伝えていくことも大切である。

ウ 各校の取り組み

多くの体験を通して自尊感情を育てた

いが、業務改善の視点からも、体験の目的をはっきりさせ残すものとやめるものを取捨選択することを考えている。

よいことをした時に、グリーンカードで評価する取り組みを行っている。

(2) 分科会のまとめ

「自尊感情に支えられた学力を育てるために」ということについて以下の2点にまとめられる。

① 校長の明確なビジョン

ア 校長自らが授業をすることで「みる まつ きく」の定着を図る取り組みが効果的である。

イ 校長のビジョンについて職員が実践していることを肯定的に評価することでビジョンはより明確になる。

ウ 掲示板を使って教職員の実践を肯定的に評価し、教職員の自尊感情を育むことは有効である。

② 校内研修・授業研究のあり方

ア 校長のビジョンが授業の中でどのように達成されているかを評価することは有効である。

イ 映像による授業研究会等、研究の方法について工夫することで効果があがる。

ウ 子どもの言動など事実から見取り議論する姿勢を学びたい。

エ 研修・研究を充実させるためにはゆとりが必要である。そのためには効果的な業務改善をしていかなければならない。



<健やかな体…健やかな体を育むカリキュラム・マネジメント>

少子化が進む中山間地域における児童の体力向上と校長の役割

提案者 鳥取県日野町立黒坂小学校長 下村 敏彦

1 提案要旨

(1) はじめに

日野郡は急激に過疎化・少子化が進んでおり、児童数は10年前と比べて半減している。また、生活スタイルの変化により地域の自然の中で遊ぶ子どもたちの姿はなくなり、学校統合によりバス通学児童が激増した。この状況は、子どもたちの生活習慣や心身の成長・発達に大きな影響をもたらしている。少子化が進む中山間地域における児童の体力向上の推進について、校長としてどう取り組んで行くのかをまとめた。

(2) 研究の概要

① 体力向上のカリキュラム・マネジメント

ア 体育授業での取組

- ・地域や児童の実態を踏まえた年計を作成した。
- ・高学年体育において中学校体育教員とのTT指導を行った。

イ 特別活動や行事等での取組

- ・児童会主導による業間運動を行った(サーキット、ワンミニッツ・エクササイズ、遊びの王様ランキングなど)。
- ・地域と連携した行事を行った(カヌー教室など)。

② 体育の授業改善に向けた取組

ア 小教研体育研究部との連携

- ・研究推進の方針を郡内で統一した。
- ・授業づくりの考え方について他校と連携して検討した。

イ 体育に関する合同授業研究会の実施

・領域を指定して継続的に取り組んだ。

・教育委員会と連携して取り組んだ。

ウ 鳥取県小学校体育研究大会の開催

・日野郡内各小学校の実践発表・授業公開を行った。

③ 体力向上に関する意識調査の実施

・実施主体 日野郡小学校長会

・調査対象 日野郡内小学校全児童

・実施年度 平成29年度～令和元年度

④ 体力・運動能力調査結果の分析

男女とも、取組を継続していく中で、県平均と比較して数値の低かった学年が減少し、県平均を上回る学年が増加した。

⑤ 校長の役割

ア 校長間の共通理解と学校連携

・地域課題の共通認識と解決への共同実践

・小規模校の特質を生かした実践の推進

イ カリキュラム・マネジメントの工夫

・課題解決に向けた教育課程の編成と管理

・保育園・幼稚園・小学校・中学校や地域、教育委員会との連携の推進

ウ 校長のリーダーシップによる教職員育成

・合同授業研究会を通じた指導力向上

(3) おわりに

校長自身が課題把握を進める中で見識を深め、解決のビジョンを明確に示し、機能的な組織・体制づくりを進めるとともに、教職員の資質を高めながら指導力の向上を図ることが必要である。併せて、校長同士が連携・協力しながら、組織的な取組を行い、カリキュラム・マネジメントを推進

することが大切である。

2 研究協議

(1) 質問及び協議

① グループ協議

＜研究協議の柱＞

体力向上に向けたカリキュラム・マネジメントと校長の役割について

ア 小学校として体育で育成する力は、調整力だと考える。それを育てるものの一つに「わたしたちの体育」の活用が挙げられる。各校が、それをどのように活用しているのか。子どもたちの育ちにどう使われているのか。各校の子どもたちの実態に沿っているのか。校長として実態を把握し、方向性を示していくことが大切である。それにより、授業づくりの充実につながり、子どもたちの調整力、体力、運動能力を高めることができる。

また、優れた講師（中央研修の受講者、大学教員など）を招いて職員研修を行い、若手の育成に努めていかなければならない。

取り組む上での問題点もいくつか考えられる。

- ・朝運動、業間運動時に事故が起こった時の校長の責任はどうか。
- ・中山間地の高学年の体育と中学校の部活動への接続をどうするか。
- ・バス通学で歩く機会が少なくなった子どもたちにとっての学校体育はどうあるべきか。
- ・働き方改革と研究推進のバランスをどう取っていくか。

イ 具体的なデータをもとに課題を分析し、4校が課題意識と共通認識を持って取り組んでいるところが素晴らしい。また、県小学校体育研究組織と連携して体育の授業改善を行っているところがよい。

課題として次の点が考えられる。

- ・体育研究組織と連携して行ったことを学校文化としてどう構築するか。
- ・取組のマンネリ化を防ぐために、体育科での取組を遊びなどの日常生活にどうつなげていくか。
- ・子どもたちの体力向上のためには、地域や保護者との連携が重要になる。コミュニティ・スクールを有効に活用できないか。

(2) 分科会のまとめ

子どもたちの課題解決に向けて、校長のリーダーシップの下、教育課程の編成に取り組み、体育の授業の充実を図っていくことが重要である。また、学校だけではなく、家庭、地域、保育園、幼稚園、中学校などとの連携を深めながら、カリキュラム・マネジメントの工夫をしていくことが大切である。併せて、環境整備を図りながら安全管理に気を配っていくことも大切である。

子どもたちの体力向上を通して、集中力や協調性が養われ、豊かな人間性や自尊感情の向上につながっていくと同時に、教職員の効力感の向上にもつながっていくものと思われる。

